



くまざさ



湖陵高校創立百周年に向けて

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。早いもので、私がPTA会長に就任しまして一年が経とうとしております。皆さまにおかれましては、日頃より本校PTA活動に深いご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

「光陰矢の如し」と申します通り、「湖陵に長し六十年・・・」と歌いし私たちが卒業し、三十年以上の歳月が流れました。

湖陵高校PTA会長 伊藤 真司



えますと、その責任の重さにあらためて身の引き締まる思いでおります。社会構造や教育環境の変化により子供たちを取り巻く環境、生活スタイルも大きく変化しました。私たちは、時代の変化に即応し、常に「生徒たち」のためのPTA活動であることを踏まえた上で、本校の目指す学校像・生徒像の実現に向け、学校と一体となり、教育環境の改善と生活学習風土の醸成に努めていくこと

今の生徒たちの日頃からの真剣な取り組みと努力、さらに進路指導部を中心とした諸先生の熱意を強く感じます。今年度のセンター試験の校内平均点も好成績であったとのことです。生徒の皆さんには、最後まで諦めずに最善を尽くし、目標を達成して頂きたいと思っております。さて、本校創立百周年記念事業におきましては、葭本実行委員長のもと「創立百周年・定時制九十周年実行委員会」が組織され、傘下に式典記念講演部会、祝賀会部会、記念誌部会、記念事業部会が設置されました。

PTAとしては、学校の記念事業として関連の深い式典記念講演部会および記念事業部会を中心に参画させて頂き、百周年記念事業として「学校に対して何が出来るのか、何をすることが最良であるのか」、「現役の子生たち」にどの様な形で参加してもらうのか、また「将来入学してくる生徒たち」のために何を残せばいいのか」等を学校と十分に協議した上で、実行委員会とも緊密に連携し、百周年に向けた準備に取り組んでまいりたいと考えております。皆さまのご協力、ご支援をお願い申し上げます。

が重要であると考えております。

昨年度の国公立大学入試の結果に目を向けますと、東大1名、京大2名の超難関大学の現役合格を果たし、国公立大学の現役合格率は史上第3位の47.3%、1学級当たりの合格者は18.7人の好成績を残してくれました。私たちが在学していた当時は、国公立大学の現役合格率が20%程度であったことを考えますと、

のか、「現役の子生たち」にどの様な形で参加してもらうのか、また「将来入学してくる生徒たち」のために何を残せばいいのか」等を学校と十分に協議した上で、実行委員会とも緊密に連携し、百周年に向けた準備に取り組んでまいりたいと考えております。皆さまのご協力、ご支援をお願い申し上げます。

| | | | |
|--------------|------|------------------|----|
| 100周年へ本格始動 | 2頁 | 同窓会だより | 6頁 |
| 日本傳講道館柔道 | 2頁 | 戦後の釧中、釧高、湖陵 | 7頁 |
| 湖陵生の“しごと” | 3頁 | 歴史への誇り | 7頁 |
| 誠愛勇から(湖陵16期) | 4.5頁 | 人生に夢とロマン、同窓生ニュース | 8頁 |

百周年へ本格始動

北海道釧路湖陵高等学校は、開校100年を迎えるため、2012(平成24)年9月29日(土)に式典並びに祝賀会を釧路市内で開催します。

学校、同窓会、PTA、後援会などからなる実行委員会(藤本正美実行委員長・湖陵24期)は、昨年の同窓会総会で審議され、承認されました。また、定時制90周年も同時に実施することになってい

て、同様に実行委員会が組織されることになっています。

実行委員会では、事務局、事業局、協賛金事業局などに分かれま

湖陵高校内に設けられた百周年事務局

る。事務局では、名簿管理や会計などを行い、事業局は、式典、祝賀会、記念事業などを担い、協賛金事業局は、同窓生への協賛金依頼を行う方向で検討されていて、今後さらに詳細を詰めた上で各期代表者会議で計画する予定です。

事業局の記念誌部会が、いち早く立ち上がりました。部会長には高井博司氏(湖陵6期)が就任、昨年末から数回の部会を開き、方向性を決める検討が行われています。内容は、これまでの歴史や記録のほか、100周年記念式典や祝賀会の様子も掲載します。

記念誌の発行に際し、同窓生みなさまからの在校当時などの写真、文章などを募集することも考えられますので、ご協力をお願いします。

在京釧中・湖陵高健老会の会報「友垣」に昨年、似内重喜さん(釧中19期・1936(昭和11)年卒、旧姓・竹村)が、釧中柔道部時代のことを寄稿されました。当時の学校の様子がわかりますので、その一部を改編して掲載します。

入学して正課である銃剣道とど

ちらかを選ぶ段階で、縦横が人並み以上の私は、選択の余地がなく、柔道へということになった。授業だけならまだよかったが、そのうち、先輩から放課後居残り練習を命じられた。「デカイから、こいつ仕込めば何とかなる」と目を付けたんだろが、これが全くの間違い。子どもころから、相撲くらいはとったことはあるが、けんかなんかしたことなく、闘争心欠如。勝負ということには無縁だったから、先輩は大きな誤りを犯したことになる。最初ももっぱら、受身のけいこ。いやいややっているから痛いばかりで、早く終わってくれないかな、と時間ばかり気にしていた。

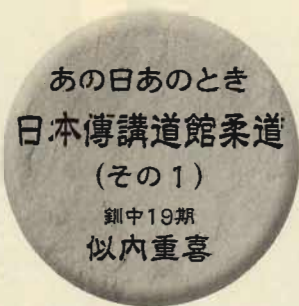
家は当時、頓化(とんけし)に

あって、斜め向かいの同級生の斉藤克巳がいて、朝「行くぞ」と呼びに来て一緒に登校。彼も柔道部に引つ張られた口だから、5年間一緒に登下校していた。いつも通り並んで歩いていて、校門から下ってくる道で、横合いから出た2

人が、バツタリと先輩に出くわした。

克巳はサッと敬礼したが、なぜか私の手は動かなかった。運動神経が鈍い方だとは思っていなかったが、間(ま)というんだらうか。4年生のTさんだと確認しながら動かない。上級生に敬礼するのは校則だから当然違反だ。

上級生の名前なんて柔道部以外はほとんど知らなかったのだが、Tさんは番長のような存在だった



ようで、私も認識していた。

「なぜ敬礼せんか」

「ハイ」

自分でもなぜか分からないから説明のしようがない。

「名前は？」

2Aと襟章が付いているから、これも聞かなくても分かる。

「竹村です」

「ヨシ」

と言って背を向けた後で敬礼した

1時間目が終わったら、

「竹村というやつ、おるか！」

と上級生が入ってきた。返事をすると、

「4Bまで来い！」というわけで、後に従う。

4Bの教室に入ると、サッと前と後ろのドアに番兵が立った。「ハア、子分か、まさか逃げはしないよ」と教卓の前に立っているTさんの前に進んだ。

「分かっているな」

「ハイ」

「バシッ」

「よし帰れ」

「??」

一発で済むと思っていなかったから、すぐには飲み込めなかった。というのも前に、授業中に猫の鳴き声が出て、猫がいるわけではない、と探したら、教壇の下で下級生が泣いていた、という話を聞いていたから、教壇の下だったら身動きができないぞ、と思っていた。それだけに一発解放は「？」だった。Tさんは反撃してくると思つたのか、一歩下がって二歩下がりが「帰れ」を連発していて、番兵はサッと席に戻っているのを見てやっとながら気がついた。そうか、授業が始まれば先生が来るもんだ、と。教室を出たところで先生がやってくるのが見えた。タッチの差だった。それからは敬礼で失敗することとはなくなった。

(続く)

「湖陵生のしごと」(その5)

社会医療法人孝仁会法人本部 地域連携部長

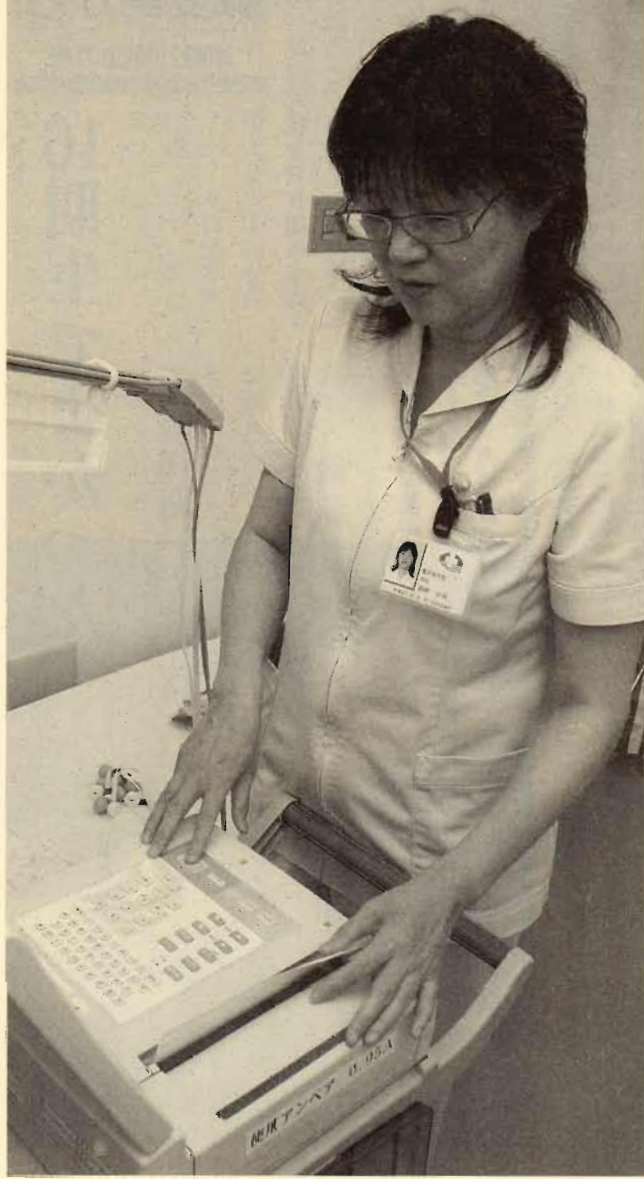
高柳 (旧姓・越田) 由佳さん

(昭和53年卒、湖陵30期)

健康を願う人々と、病院の連携をめざして

鈎路市における一大住宅地域である美原地区や鈎路湿原に隣接し、今や市内の新しいメディカルエリアとも言える文苑地区の北郊に建つ「鈎路孝仁会記念病院」。ここで地域連携部の部長として、健診事業などを取り仕切っている

のが高柳由香さんです。もともとは臨床検査技師として、道内に7つの病院を持つ孝仁会の臨床検査部長として、6病院で19名いるという臨床検査技師のリーダーを務めていたのですが、地域医療に欠かすことのできない健診事業を推進するため、新たに設けられた地域連携部の舵取りをも託されたのでした。そんな臨床検査技師とは、病院などの医療機関において、血液や心電図、脳波などの臨床検査を行う技術者で、わが国では法律によ



って定められた国家資格です。もともとこれらの検査の多くは、医師が行っていたものですが、検査の複雑化とともに分業化が進み、現在の医療ではコメディカルスタッフ(医療従事者)として不可欠な存在です。

そもそも高柳さんが臨床検査技師を志したきっかけは、高校時代に国家資格として整備された仕事の内容と、養成するための専門学校の存在を知り、「自分に向いているかも知れない」と進学を決めたことに始まるといいます。3年間の勉強を終えて、卒業後は日本赤十字社が運営する、新鈎路町の「鈎路赤十字血液センター」に勤務。ここで10年あまり、献血された血液の検査などを担当し、臨床検査技師としてのキャリアを積んだそうです。

やがて、鈎路市にあらたに開院した「鈎路脳神経外科病院」、現在の孝仁会における最初の施設に

転職し、以来、理事長や院長をはじめとする経営陣の厚い信頼を得て、現在に至っています。

最近では臨床検査技師を養成する機関は、多くが医療大学など、4年生大学の1学部となっていることが多いのですが、看護師同様に多くの医療機関がスタッフの不足を訴える、引く手あまたの職業としても注目を集めている資格です。

「業務はそれなりにハードで大変なのはもちろんですが、現在の先端医療の現場では、より以上に多くの現場で求められている資格ですし、大変である分、やりがいのある仕事であると言えると思います」と高柳さん。後進の指導を続けながら、進路を考えている後輩にも臨床検査技師への道をアピールしています。

毎日数多くやってくる患者さんからはもちろん、職場の同僚スタッフやドクターからも絶大な信頼を寄せられている高柳さん。家庭では良き主婦・良き母親であると同時に、それらと同じぐらいの情熱と愛情を仕事に注ぎ、地域医療の向上と住民の健康維持のため、さらには地域に密着した医療を実現させるために、さまざまな検診事業や講演会に出向くなど、毎日を忙しく駆け回っている高柳さんなのでした。

16期生でよかった

湖陵16期 小森 研二

(千葉県柏市在住)

無試験入学

来年、湖陵開校100周年を迎えるとのこと、喜ばしい限りである。

私たち湖陵16期生は在学中、高校2年の時だったと思うが、50周年を迎え記念行事が行われた。このような節目の年を二度も迎えることができるということは、幸運と言ってよいかも知れない。

私たちの高校生活は、無試験入学からスタートした。高校入試はなし、内申書だけで選抜された。志願者が少なかったことによるのだが、志願者だけでなく、ちょうど終戦の年に生まれた私たちの学年全体が少なかったことによる。



50周年記念で建てられた図書館



もっともすぐ後の「団塊の世代」と呼ばれる世代が押し寄せ、結局は彼らに吸収されてしまったのだが…。

この無試験ということが、良かったのかどうかという評価はなされていない（評価する必要もないか）。ただ後述することになると思うが、特に卒業してから、歳をとつてからは団結が強いという意味ではなく、和気あいあいという感じで仲がよく、集まることが多い。これは競争なしで入ったことが影響しているのかもしれない。

ちなみに本文のタイトル「16期生でよかった」は数年前、東京湖陵会の会報に、同期の女性が書いたものを拝借したものである。

高校時代

さてそんな私たちが、高校時代はどんなものだったのか。他の学年、特に先輩諸氏とそんなには変らない生活を過ごしたのではないか。

勉学

進学について他の学年より良かったよかったのかどうかについては、分からない。そんなにひげをとるものではなかったのではないかと、思っている。

2年生からは卒業後の進路によってクラス分けされていた。その影響で男子だけのクラスができた。私はそのクラス出身である。

いまだに女性に接する時のギコチなさは、このことが影響しているかもしれない。

また私もそうだが、「湖陵梅風塾（中川塾）」に通っている者が結構いた。塾では単に勉強だけでなく、大袈裟に言えば、生き方みたいなものも学んだような気がする。

私が高校3年の時に銅中一期生であり、塾の創設者でもあり、後輩の育成に情熱的に取り組まれた中川久平先生は亡くなられた。先生は銅路市の教育委員長も務められ、文字通り銅路の教育界に大きく貢献した。私たちは最晩年の教え子となった。

イベント

イベントについては、行われるべきものはほとんど行われていたと思う。文化祭、行灯行列、体育祭（バレーボール、バスケットボール等々）マラソン大会、兎（うさぎ）狩り、そして既述のように50周年記念行事も行われた。

兎狩りはその後間もなくして、なくなったとのこと、時代なのか。あの寒い冬の日に大楽毛の原野を



平成17年に銅路全日空ホテルで行われた還暦同期会



平成3年に行われた在京同期会

部 活

走り回ったことを思い出す。

ここで部活、特に体育会系にも触れておかねばならないだろう。野球は地区予選で釧路商業に敗れた。商業はその夏、甲子園出場を果たした。

バスケットボールも全道大会準決勝で惜敗、全国大会出場はならなかった。バレーボールは前年男子が全国大会に出場したが、私たちの時代全国大会への道は遠かった。

そして昭和39年、私たちは学窓から巣立った。東京オリンピック

の年、新幹線が開通した年でもあった。日本は高度成長に突き進んでゆく。私たちもその担い手として、走り続けた。

時は流れ

平成2年4月に「湖陵同窓会東京支部」の第1回設立総会が開催された。その後同会は「東京湖陵会」と名を変え、欠かさず毎年開催されている。

在京同期会

私たちもいつしか歳をとり、それなりに多少の余裕もでてきた、と同時に疲れてもいた。

そんな時に同窓会で同期の人間に会う、あつという間に時を超え昔に戻る。同期会をやるよ。こうして

第1回の在京同期会が平成3年5月に開催され、25名が集まった。その後中断もあつたが、いつからか毎年のように開かれるようになった。当初同

期会は都内で開かれていたが、富士山方面に1泊で行くようになった。バスの中は、さながら昔の修学旅行の観を呈し、笑いが途切れることはなく、いや途切れた時は皆眠っていた。釧路からの出席者も増え、40名を越えるようになった。

同期会の時には自己紹介をするのが通例であり、1人1分だよと念を押していた。ある年、延々と独演会をした友がいた。いつ終るともなく話しまくりに、トイレから戻ってもなお話していた。翌年その友が姿を現すことはなかった。どちらかというと寡黙だと思われていた彼は、覚悟のうえで前年にラストメッセージを残し、旅立ったのだ。毎年のように集まるようになったのはそれからだったかもしれない。



忘れられない文化祭の行灯行列

一方釧路でも毎年の同窓会の後に必ず同期会を開いていたとのことであった。

還暦同期会

平成17年に還暦を迎えた。還暦を記念しての同期会は10月釧路の全日空ホテルで開催され、全国から127名が集まった。翌日は2台のバスを連ね修学旅行よろしく阿寒方面を周遊し、川湯で一泊した。

その後平成20年に2回目、この時は知床まで足を延ばした。そして昨年、平成22年に3回目、定山溪に60名が集まった。

余生を楽しもう

同期会についてはこの先も決まっている。次回は湖陵100周年に合わせ平成24年、その次は私たちが古稀になる平成27年までが予定されている。

それ以外にも釧路では同窓会の後に必ず開かれるだろう。また在京同期会もやることになるだろう。私たちが段々近づいているのだから。

個人的にも高齢者故の特典を使つて何度も釧路へ行くつもりである。なんといつても金はなくとも暇だけはたくさんあるのだから。行けば誰かがなんとかしてくるに違いない。

遠い昔 15歳で知り合い、3年間共に学んだ若者が、50年の歳月を経てなお語り合えるという幸せ。その幸せを噛みしめながら、余生を過ごすこととしよう。



間もなくなくなった大楽毛での兎狩り

同窓会だより

総会で旧交を温める

釧中・釧路湖陵同窓会の2010年度同窓会・総会が8月14日に、釧路キャッスルホテルで行われました。同総会には500人を超える同窓生が出席して、高校時代の思い出話に花を咲かせていました。総会では、同校合唱部が在校生

とともに「日出づる国の…」と校歌を斉唱しました。栗林延次会長（湖陵17期）は、2年後に迫った100周年に向け「準備を着々と進めている。湖陵という母に育てられた同窓生で、100歳を祝いましょう」と呼び掛け、続いて、来賓を代表して田川芳紀校長と蝦名

大也市長（湖陵29期）が祝辞述べました。

総会では栗林会長ら役員全員の留任と、100周年記念式典を2012年9月29日に開催することなどが報告されました。懇親会は、東京湖陵会の鈴木寛幹事長（湖陵23期）と札幌湖陵会の伊藤拓摩会長（湖陵21期）の音頭で乾杯し始まりました。ステージで練り上げられた同校チャリダー部のダンスと



生徒たちの活動を報告した田川校長

合唱部、器楽部の演奏などに大きな拍手が寄せられていました。なお、2011年の総会幹事は、29、39、49期です。文・星 匠（湖陵30期） 写真・西村貞弘（湖陵30期）



校歌を斉唱し心一つに



「100周年に協力を」と栗林会長



あいさつする蝦名市長



たくさんの同窓生でにぎわった会場



合唱部の澄んだ歌声が会場に



2011年度の幹事期が決意表明

戦後の釧中、
釧高、湖陵

湖陵5期・舟崎明雄（東京都在住）

り、新制中学までが義務教育となり、釧中は校名を釧路高等学校と称する事になった。旧制の高等学校は廃止され、いわゆる予科も無くなった。だから昭和5年生まれの方は、大学へ行くべく学ぶ旧制の高校も予科もないので、そのまま釧路高等学校に残ることになった。

不思議な事に、この人たちが現在、湖陵の1期生となつていて、湖陵が存在せず、湖陵に一度も通わずに1期生というので、本人たちもピンとこないと言っている。

本来この人たちは、釧路高等学校の1期生であるべきだ。昭和6年生まれの方は、2期生なのだ。釧路高卒業生は、この2代で終わる訳だ。

さて、昭和22年の学制改革で、釧中を受験した昭和7年生まれと昭和8年生まれはどうなつたかというところ、釧路高等学校併置中学3年生と2年生になった。昭和8年生まれの方、最後の入学は、これから4年間、我々昭和9年生まれが湖陵1年生として入学するまで、最下級生としてイジメの対象になるといふ過酷な運命を歩く事になる。予科練帰りの戦中の上下関係のしつかりした、現在の体育系のような風潮だつたから最悪の4年間だつたらうと同情している。

我々が湖陵に入学したのが昭和25年。この時の校長は牧野包敏先生。入学時の訓辞で「今日から北海道釧路湖陵高等学校と称します。庁立も道立も付かない」と宣言した。だから昭和7年生まれが湖陵1期生で、我々昭和9年生まれは3期生だと思つていた。いつのころだか分からないが、我々は5期生となつてしまった。変だ！変だ！と言つても誰も取り上げてくれない。今年は何期生が生まれるのだろうか？

一度も通つたことのない湖陵1・2期生は困っている。存在しない卒業生と言われても困る訳だ。年代表を書き込む時、どうするのだろうか？昭和22年の学制改革。6・3・3制実施。釧路高等学校と改称。同時に併置中学に2・3年を収容：とならないといけない。そして昭和25年新制高校として、北海道釧路湖陵高等学校と改称：とならなければいけない。卒業年次は、既存の方はマイナス2とするなど、どこかで、きつちりとしなければいけない。早くしないといけない。真剣に考えてほしい。

特に家庭の都合で就学不能になり、やむなく併置中学卒業で兄弟姉妹のために働いた人は、何人もいる。昭和7年生まれの菅原仁さんなんか、釧高の併置中学がない

と戸籍を抹消された気分でしょう。江南は、昭和7年生まれが江南の1期生であり、我々昭和9年生まれは3期生である。同じ学制改革で、同じ年に新制高校になつたのに、おかしいと思わないのが不思議だ。どうか議論を重ねてほしい。

ところで、釧中の創立は、1913年（大正2）年となつていて、2012（平成24）年に創立

馬伝」に勝海舟が出てくる。

2009年4月、久しぶりに上京した。赤坂のホテルを出て目的の会場に向かう途中、ふと小さな鑄物製看板を目にした。勝海舟旧邸・永川神社と書かれてあり、近い

ので立ち寄つてみた。

小さなレス
トランの場
所に目立た

ない勝海舟の説明板があり、この地で勝海舟が晩年を過ごした、有名な「水川清話」を語つた場所かと、暫し明治時代に思いをふけた。そこから坂道を上ると扉に閉まれて水川神社があり創建は1730年と古く、境内の樹木も高い。勝海舟はこの

立100周年を行うとなつていて、私は難しい事を言う気はない。2012年で事が進んでいて、今年さら2013年という訳にはいかないというのなら、100周年とは言わずに、100年にしたらどうかと、言っているだけなのだ。2012年には100年目に入っているからだ。歴史を正しく検証しないと、このようなことが繰り返されるのではないか。

氏子総代を務め、扁額を納めた。釧路を離れ東京や他都市に行く度に旧跡の案内看板が目立ち歴史が身近にあると痛感する。説明板を立てた地元の歴史に対する誇りがそこにあつた。翻つて、では釧路はどうか考えてみた。

歴史への誇り
釧路はどうか

石碑やモニ
ュメントを
建てても旅
人や現代人
が分かる案
内看板や説

明板がない、あつたとしても少ないし朽ちかけて読めない。釧路には歴史がないとポヤクが、人間の営為には大小の差こそあれ必ず歴史があり、それに誇りを示してほしい。

田巻 恒利（湖陵18期）

同窓生ニュース

池田緑さんが初の個展

昨年8月、湖陵高校に係わる話題が二つあった。一つは湖陵卒OGで少女漫画家の小畑友紀さん(銅路市在住)で、コミック累計900万部のヒット作『僕等がいた』の原画展がJR銅路駅で開催され、全国からファンが訪れた。小畑さんは、2005年に小学館漫画賞を受賞、06年から漫画と同名でアニメ化され全国放送された。あらすじは高校入学から始まる青春恋愛物語で湖陵高校や幣舞橋・銅路駅が漫画のモデルらしい。ところで、どなたか小畑さんの湖陵高卒業年を教えてください。

○：現代美術家、池田緑さん(帯広市在住・湖陵14期)の作品展「Silent Breath」沈黙の呼吸」が、北海道立銅路芸術館で昨年9月14日から10月24日まで開かれました。池田さんは、小学校6年生で来銅、旧柏木小学校、東中学校(現幣舞中)、湖陵高校、道学芸大学銅路分校(現道教大銅路校)を卒業しました。流木や保健用マスクなどを使った現代アート作品を発表していて、銅路での個展は初めてでした。

銅中30、31期同期会

○：銅路中学校(現銅路湖陵高校)30期(1946年卒)、31期(47

計報

次は一青窈(ひとと・よう)のヒット曲『ハマミズキ』が原作の映画『ハナミズキ』が全国公開された。あらすじは進学校に通う女子高生と水産高校に通う男子高生との青春恋愛物語だが、映画ロケ地の住民には湖陵高校と厚岸水産高校がモデルと映る。銅路ロケの幣舞橋、出世坂、白糠港、西庶路駅、霧多布岬灯台、音別町民家、北陽高校などに主演の新垣結衣、生田斗真を一目見ようと賑わった。

小説・漫画・アニメ・映画などコンテンツ(内容)産業による町おこしは人々の人生に夢とロマンの共感を呼び重要である。

田巻 恒利(湖陵18期)

平川剛喜さん(銅中22期)が昨年9月19日、銅路市内の病院で亡くなりました。88歳でした。平川さんは、銅路市出身で、旭小学校、旧制銅路中学を経て、旧制福島高等商業学校(現福島大学経済学部)卒業後、雄別炭鉱銅路営業所長、銅路新聞社代表取締役社長などを歴任しました。同窓会には必ず出席して元気な姿を見せてくれていただけに残念です。合掌。

年卒)道東ブロック同期会が、昨年8月に銅路市内のアクア・ペールで開かれました。生徒時代は、第二次世界大戦の真つ最中で、軍人の学校へ約4分の1が志願、修学旅行や卒業アルバムもありませんでした。東は強いものがあります。

湖陵21期還暦同窓会

○：湖陵21期(1969年卒)の還暦同期会が、昨年10月9日に銅路キャッスルホテルで開かれ、道内外から145人が出席しました。銅路では初めての同期会です。曾宇恭久会長が「皆さんは若々しく元気。まだまだ頑張らなくてと、勇気をもらった」とあいさつ、懇親会では旧交を温めていました。

星 匠(湖陵30期)

編集後記

▼昭和38年4月に、教職に就いてから38年間、職を全うして退職し10年が経過し、古希を迎える▼ボランティアで、ましも学園の中学生数名の家庭教師がわりや、コア鳥取で「くしろ社会人学級」の講師など結構楽しんでるが、教師をやっている良かったなあと思つづくと思うこの頃である▼教師になろうと思つたのは小学6年の時

で、こんなエピソードがきっかけになったのである▼小学6年になった春先。男子ばかり数名で昼休みに校舎の横を流れる川で水遊びをしていた。あまりにも楽しかったので、午後の授業が始まったのも忘れて、だいぶ経過してから教室に戻った▼当然、担任の先生に叱られた。「授業に遅れてきたのはお前達が悪い。だから、ゲンコツをやる。でも、そんな子供に育てた俺も悪いのだから、まず俺の頭を殴れ」▼自分に順番が回ってきた。先生の頭を軽くポンと叩いた。「そんなんじや、俺も思いつき叩けない。思いつき殴れ」▼担任のゲンコツは結構痛かった。なぜか涙がポロポロと流

れ出た。しかし、泣けてきたのはゲンコツの痛さよりも、担任の頭に手を挙げたということの方が胸を詰まらせてしまったのだと、今でも昔を思い出しながら思っている▼その後、こんな担任のような教師になりたいと考えたのだから。その担任もいまは亡い。このような教師が今の教育界にもたくさんいたならば、もつともつとすばらしい子供たちが育つたであろうと述懐するこの頃である。

川端紀一(湖陵11期)

銅路湖陵高校

銅路市緑ヶ岡3丁目1番
TEL(0154)43-1313
ホームページ
<http://kushiro-koryu.hp.infoseek.co.jp/>

くまざさ編集委員会

- 同窓会会長 栗林延次(湖陵17期)
- 同窓会幹事長 島本幸一(湖陵19期)
- 同窓会会計長 佐藤文昭(湖陵22期)
- 編集委員長 星 匠(湖陵30期)
- 編集委員 川端紀一(湖陵11期)
- 編集委員 増子正樹(湖陵20期)
- 編集委員 渋谷倫之(湖陵26期)
- 編集委員 西村貞広(湖陵30期)
- 編集事務局長 田巻恒利(湖陵18期)

くまざさ編集委員会

〒085-10014
銅路市末広町2丁目4番地
TEL0154(23)0241
TEL0154(23)0241
手動切替FAX
0154(23)0242



(前列左から)川端紀一、渋谷倫之、田巻恒利、奥田達也
(後列左から)佐藤文昭、増子正樹、西村貞広、星匠